

経験の豊かさは何によって測られるべきか？

——「大いなる錯覚」を巡る議論の含意——

呉羽 真

1. 経験の豊かさと〈大いなる錯覚〉

われわれは日常生活において、知覚経験は豊かなものであると信じていると言ってよいだろう。経験は、空間的にも時間的にも連続した一つの流れを形作っており、様々な色や形を持った対象に彩られた世界を隅々まで捉えている。こうして知覚経験はその流れの中に一つの豊かな物語を映し出すことができる、と考えられる。

しかし、われわれの直観は往々にして間違っている場合がある。実際に、脳神経科学の成果や知覚心理学における様々な実験に基づいて、経験の豊かさに疑いを呈する論者たちがいる(e.g., Dennett, 1991, Blackmore, 2002)。彼らによれば、経験がどれほど豊かであるように見えようとも、実際にはそれは貧しいものであり、経験が豊かであるというわれわれの信念は偽である。すなわち、知覚経験は「大いなる錯覚 (grand illusion)」(Noë, 2002)である、と彼らは主張する。

その一方で、こうした〈大いなる錯覚〉説に抗して経験の豊かさを擁護しようとする論者たちの代表例が、知覚の「感覚運動説 (sensorimotor account)」を提唱するノエとオリーガンである(O'Regan & Noë, 2001, Noë, 2002)。しかし、〈感覚運動説〉もまた、クラーク(Clark, 2002)などからの批判に直面している。

〈大いなる錯覚〉説 (GI 説) は、経験が豊かであると告げるわれわれの現象学——われわれの意識経験に関する観察、ないしはこれに基づいた信念体系——に対する挑戦と見なすことができる。本稿の狙いは、〈大いなる錯覚〉を巡る論争から、経験の豊かさは何によって測られるべきかについての含意を引き出し、さらに経験の説明における現象学の位置についての考察を行なうことにある。そこで、このような観点から、まずデネットやブラックモアの GI 説を紹介し、次いで感覚運動アプローチの知覚理論とこれに対するクラークの批判を見ながら、現象学をどのように受けとるべきかを考察していく。

2. 新しい懐疑論とその根拠

2.1 新しい懐疑論

まず、ここでの議論における「錯覚」という言葉の意味を明らかにしよう。ブラックモ

アは次のように述べている。

わたしは、意識が錯覚であると言うとき、意識が存在しないと言おうとしているのではない。わたしが言おうとしているのは、意識が、それがそうであるように見えるところのものではない、ということである。(Blackmore, 2002, p. 17)

例えば、経験が連続的であるように見えて連続的でない、あるいは詳細に見えて詳細でないならば、経験は錯覚であると言える。彼女らは、経験そのものの存在ではなく、特にその豊かさ、あるいは「豊かで詳細な諸経験の一つの連続的な流れ」(ibid.)の存在を否定しようとする。こうした GI 説の主張は、また「新しい懷疑論」としても定式化されている。

知覚経験に関する伝統的な懷疑論は、事物が、われわれがそれを経験する通りの仕方
で存在しているかどうかを問う。(……) 新しい懷疑論は、われわれがそれを持っている
と考えている知覚経験を、われわれがそもそも本当に持っているのかどうかを問う。
(Noë, 2002, p. 1)

さて、こうした懷疑、あるいは経験が貧しいという主張はどこから生じてきたのだろうか。
経験的研究を取り上げつつ、デネットやブラックモアの議論を見ていこう。

2.2 視覚器官の貧困と〈書き込み〉の不経済

知覚システムの基盤を成すところの感覚器官が決して豊かなものでないことは、すぐに
気づかれよう。視覚を例とすれば、まず、われわれの網膜上には、光受容器を欠いた「盲
点」が存在する。われわれは普段盲点の存在に気づくことはないが、簡単な実験によって
その存在を確認できる。右目を閉じて、左目で下の右側の点を凝視せよ。このページと自
分の顔との距離を 20cm 程度に調節すると、左側の黒い菱形が見えなくなるだろう。この
とき、黒い菱形にはあなたの盲点があてがわれている。



また、われわれの視野には中心から周辺にかけて一様な解像度が具わっているわけでは
ない。これもまた簡単な実験によって確認できる。デネット(Dennett, 1991)の挙げる例では、

一組のトランプからカードを一枚、それが何のカードか分からないように引き、真っ直ぐ前方を見たまま、それを視野の右側か左側の周辺にかざすと、それが赤いカードか黒いカードかさえ分からない(ibid., pp. 53-54)。

われわれの視野は映画の映像と異なり、連続的でもなければ一様でもない。しかし、われわれは普段この事実気づかず、豊かな視覚経験を享受しているように思える。そこで、脳には視覚器官の貧困を補う能力があるに違いない、と考えられてきた。視野にギャップが存在するときに、このギャップを埋めるために働く想定される脳のプロセスは、「書き込み (filling in)」と呼ばれる。例えば、先程の盲点の実験のときに、黒い菱形が消え去った後には、視野に暗い穴が空いていたわけではあるまい。そこには周囲と連続した白い紙が広がっているように見えただろう。この場合、脳が盲点に対応する箇所を色や質感で「書き込む」のだと考えられる。

しかし、デネットは、脳が実際にこうした書き込みを行なっている、ということを否定する。例えば、何百枚もの同じマリリン・モンローのポートレートが壁に貼られた部屋に入っていくとき、これらが同じ写真であることを一瞬で見て取ることができる(ibid.)。これは、脳が中心窩から離れた低解像度の視野に対応する箇所を、一斉に同じ写真の模様で書き込むからだ、とされる。しかし、デネットによれば、脳は視野にギャップが存在するとき、このギャップに対応する各箇所に対していちいち表象媒体を生み出してこれらを書き込んでいく、という不経済なことをする必要はなく、視野のギャップに対応する箇所全体に視覚情報を簡易な仕方コード化した「ラベル」を貼り付けるだけで事足りる。上記の例では、脳はわざわざマリリンたち一人一人の高解像度の詳細を表象したりはせず、ただ一人のマリリンを確認すれば、残りもマリリンである、と速断して、当該箇所全体に「もっと多くのマリリンたち」というラベルを貼り付ける。結果として、書き込みを行った場合と同様に、何百人もの同じマリリンたちを見ているように思われる⁽¹⁾。しかしこのようにラベルを貼り付けた場合、視覚器官の貧困に起因する視野のギャップは、実際に埋められるのではなく、無視されているにすぎない。

内観の上で経験が連続的であるように見える、という事実は書き込みの存在に関して決定的なものではない。黒い文字で「赤い文字」と書くことができるように、表象媒体の性質と表象内容の性質とは区別されなければならない。内観がわれわれに与えるのは表象内容だけであり、表象内容からは、経験がそこから生じるところの表象媒体の性質について知ることはできない。視野が連続的なものとして表象されるために、脳が何か連続的な産物を生み出す必要はないのである。そこでデネットは次のように言う。

意識の最も驚くべき特徴の一つは——最も単純な例を挙げれば、盲点やサッカード⁽²⁾の隙間に示されているように——その不連続性にある。意識の不連続性が人を驚かすのは、その見かけの連続性のためである(ibid., p. 356)。

意識経験はそれがそうであるように見えるような連続的なものではない。すなわち、意識経験はその連続性について「錯覚」である、とデネットは考えるのである。

2.3 変化盲と不注意盲

視覚経験の豊かさを疑う根拠は、視覚器官の貧しさだけにあるのではない。知覚心理学の実験から、知覚が注意に依存することを示唆する二つの現象が報告されている。

一つは「変化盲(change blindness)」と呼ばれる。「視線追跡実験」では、被験者はスクリーン上のテキストを読むように求められる。コンピューターは視線追跡装置を備えており、被験者のサッカード中に、その視線の行き先を読みとって、その位置にある単語をそれと同じ長さの別の単語に差し替えてしまう。被験者は変化に気づかない(Dennett, 1991)。

実験室でなく実世界において変化盲を実証した実験もある。実験者が通りすがりの人に道を尋ねる。二人が話していると、ドアを運んでいる作業員たちが二人の間に割って入り、通り過ぎていく。このとき、会話をしていた実験者がドアの裏に隠れていた別の人と入れ替わる。しかし、この実験を被った15人の内7人は、このことに気づかず、入れ替わった後の方の人と話し続けた(Simons & Levin, 1998)。

われわれはまた、対象の変化だけでなく、予期しない刺激が突如現れた場合にも、これを知覚し損なうことがある。これは「不注意盲(inattention blindness)」と呼ばれる現象である。有名な実験では、被験者はスクリーン上に提示される十字の刺激を見て、その縦の棒と横の棒のどちらが長いかを答えるよう求められる。数回目の試行で、警告なしに、スクリーン上の周辺視野に当たる部分に、色のついた三角や四角の刺激が提示される。被験者の25%はこれに気づかなかった(Mack & Rock, 1998)。

シモンズとチャブリス(Simons & Chabris, 1999)の実験では、被験者はバスケットボール・チームがパスを回している映像を見せられ、パスの回数を数えるように求められる。映像の途中で、傘を差した女の人、またはゴリラの着ぐるみを着た人が現れ、コートを通り抜けていくが、被験者の33%がこの出来事に気づかなかった⁽³⁾⁽⁴⁾。

変化盲や不注意盲といった現象を踏まえてブラックモアは、「われわれの心の中には、意識の流れの内容でありうるような、安定した豊かな視覚表象は存在しない」(Blackmore, 1995, p. 23)と述べる。すなわち彼女は、われわれがあるシーンを眺めるとき、直観的には、

これを豊かで詳細な表象を用いて意識の連続的な流れにおいて捉えていると考えているが、こうした〈意識の流れ〉が存在するという直観は錯覚である、と主張する⁽⁵⁾。

3. 知覚経験の現象学的研究

3.1 知覚経験の〈スナップショット説〉

第2節で見た数々の経験的研究は、確かに、知覚経験を「写真のような」と見なす知覚観を脅かすものである。ノエが「経験のスナップショット説」と呼ぶこのような知覚観によれば、知覚経験とは、世界を中心部から周辺部まで一様な詳細さと高い解像度において捉えるような内的表象を持つことに他ならない(Noë, 2002, p. 2)。

経験が〈大なる錯覚〉である主張する GI 説は、単に知覚経験のスナップショット説を否定しているのではなく、ここから経験が豊かであるという信念にわれわれを導くような、われわれの「現象学」そのものを否定するものである。しかし、われわれの現象学は確かに経験の豊かさを支持しているように思えるが、同じように経験のスナップショット説をも支持するか、という点には異論がある。第3節ではこの問題を、GI説がその論拠とする、意識の連続的な流れの不在、知覚における詳細さの欠如、および知覚の注意依存的性格、といった点について、知覚経験の現象学的研究を取り上げ、考察する。

3.2 〈意識の流れ〉の構造

「意識の流れ」という表現は、ジェイムズ(James, 1890)が、内観的方法によって見出した、「意識はそれ自身に対してバラバラに切り刻まれた姿で現れるのではない」(ibid., p. 233)という意識の性格を言い表すために提案した比喻である。このような流れが実際に存在すると考えることは、本当に、GI説が主張するように、誤りなのだろうか。

ジェイムズは、意識の諸部分が様々な速度で流れるという事実に着目し、これをその「実質的(substantive)部分」と「推移的(transitive)部分」に区分した。実質的部分が「大抵はある種の感覚的心像によって占められた」流れの「停止場所」であるのに対し、推移的部分はこうした停止場所と停止場所の間にあって、様々な関係の思考で満たされた流れの「飛行場所」である(ibid., p. 236)。また、上記のような明確な心像によって占められる思考の焦点は、次に現れる印象の予感のような、様々な関係の不明確な「感じ」によって取り囲まれている。ジェイムズは、こうした諸関係の暈(halo)の意識を「フリンジ(包暈)」(ibid., p. 249)と呼んだ。

第2.3節に挙げた引用箇所、ブラックモアは、〈意識の流れ〉があるとすれば、その内容は「安定した豊かな視覚表象」から成るべきであると述べることによって、〈意識の流れ〉

という考え方に経験の〈スナップショット説〉を帰属させている。しかし、「伝統的心理学が解く明確な心像は、われわれの心の実際の生において、そのごく小さな部分を成しているに過ぎない」(ibid., p. 246)と述べるジェイムズは、〈意識の流れ〉が細部や周辺部に至るまで明確な写真のような表象の連続から成ると考えているのではなく、むしろ意識の推移的部分やフリンジがこのような明確な表象の不在を補って連続的な流れを生み出していると考ええる。比喩的に言えば、〈意識の流れ〉は断続的に映写されるコマとコマの間がはっきり区切られる映画の映像のようなものではなく、コマからコマへの推移を担う、細部や周辺部について不明確な思考や予感から成るプロセスがその流れの大部分を占めるのである。従って、〈意識の流れ〉が存在すると考えることはスナップショット説にコミットしておらず、変化盲現象に見出される豊かな表象の不在という事実は、〈意識の流れ〉の存在を脅かすものではない。

3.3 知覚経験における詳細さの欠如

第2.2節で見たように、デネットは、視覚器官の貧弱さに起因する知覚経験における詳細さの欠如という事実に基づいて、GI説を唱える。例えば、〈マリリン・モンローの部屋〉の例において、「あなたにはまるで自分が実際に何百人もの同じマリリンたちを見ているかのように思われる」(Dennett, 1991, p. 355)と述べる時、デネットは、あなたが実際にはこれらのマリリンたちを見てはいないと考えている。トンプソン、ノエ、ペッソア(Thompson, Noë, & Pessoa, 1999)はこれについて、デネットが知覚経験を記述し誤っている、と主張する。トンプソンらによれば、デネットの誤りは次のような記述の内に見出される。

またある意味では、何百人もの同じマリリンたちが本当にその壁にいて、あなたもそれを見ている。しかし事実と違うのは、何百人もの同じマリリンたちがあなたの脳内で表象されているという点である。あなたの脳は単に何らかの仕方で何百人もの同じマリリンたちがいるということを表象しているに過ぎず、自分がその詳細を隈なく見ており、しかもその詳細は自分の頭の中ではなく、世界にあるという印象がどれほど鮮明であっても、そうなのである。(Dennett, 1991, p. 355)

トンプソンらは、あなたがマリリンたちの詳細を隈なく見ているような印象を持つ、という箇所に誤りを見出す。あなたは、自分自身の経験を注意深く観察するならば、次のように言うだろう。あなたは確かにマリリンたちを見ている。しかし、マリリンたち一人一人を隈なく詳細に見てはおらず、真正面にいるマリリンははっきりと見えるが、脇にいる者

ほどははっきりと見えなくなり、視野の端に映るマリリンたちに至ってはほとんど気づかれもしない、と(ibid., p. 187)。

われわれはここで次の三者を区別する必要があるだろう。

- [1] あなたが単に何百人もの同じマリリンたちがいるということを見ている。
- [2] あなたが実際に何百人もの同じマリリンたちをそれぞれ任意の詳細さで見ている。
- [3] あなたが何百人もの同じマリリンたちの詳細を隈なく見ている。

これらはいずれも「何百人もの同じマリリンたちがいる」という判断に導く。この内、[3]はあるシーンを見ることをそのシーンの詳細な表象を持つことと見なすスナップショット説に依拠していると考えてよい。デネットは[2]と[3]を暗黙裡に同一視した上で、われわれの現象学が[3]を支持していると思なす。しかし、第2節で見たように、[3]は経験的に誤りであることが示されているので、現象学は誤りであり、[1]が正しい。[1]によれば、われわれはマリリンたちを見ているように思えても、実際には見ることなく、彼女たちがいると判断しているに過ぎない。このようにデネットは推論する。しかし、われわれの現象学は[2]を支持しても[3]を支持してはいない。すなわち、われわれは、各々のマリリンたちを完全な詳細さで見ることができないが、それにもかかわらず何百人もの同じマリリンたちを見ることができる。

3.4 知覚の注意依存的性格

シーンの詳細についての豊かな表象は存在しない。しかし、それならば、シーンの様々な特徴の内、注意を向けられたものしか経験されず、この意味で経験は貧しいということになるのではないかと問われるだろう。前節で見たように、われわれはシーンの特徴を完全な詳細さで見るとしても、これらの特徴を実際に見ているのだ、と現象学は教える。この教えが正しいならば、注意されていない特徴も、何らかの仕方経験されることになる⁽⁶⁾。それでは、いかにしてわれわれはこのような特徴を経験しうるのであるか。

ノエは、この問題を「知覚的現前の問題」(Noë, 2002, p. 8)と呼ぶ。彼によれば、これは、現象学を省みるならば、次のように答えられる。すなわち、注意されていない特徴が現前しているという感覚は、われわれが今こうした特徴に対するアクセスを持ち、またこのアクセスを持っているという事実を知っていることに存する。例えば、今あなたの視野の片隅にいるマリリンたちも、あなたが目や頭、あるいは体を適切に動かすことによってはっきりと見る事が可能であり、しかもあなたはこのことを暗黙裡に知っている。このため

にあなたはこれらのマリリンたちを見ていると感じるのである。

3.5 経験の豊かさは何によって測られるべきか？

知覚経験の現象学は、シーンの詳細についての豊かな表象は存在しないにもかかわらず、われわれの知覚経験は豊かでありうる、と教える。現象学に対する懐疑論としてのGI説は、現象学を根本的に誤解している。現象学とは経験に関するパーソナル・レベルの記述であり、それが純粋に現象学的である限りで、スナップショット説のように、経験を成立させるサブパーソナル・レベルのメカニズムを前提することはありえない⁽⁷⁾。従って、スナップショット説が偽であるということから、現象学が教える経験の豊かさが偽である、あるいは知覚経験がその豊かさについて錯覚である、ということは帰結しない。

デネットは、内観によって表象媒体の性質を知ることはできないという事実（第2.2節）から、内観を方法とする現象学によっては経験の豊かさを知りえないという結論を導き出す。しかし、この推論が妥当であるのは、経験の豊かさは表象の豊かさによって測られる、という前提が真である場合だけである⁽⁸⁾。現象学はこの前提に依拠しないので、これは現象学に対する批判としては論点先取を犯している。

さて、現象学がサブパーソナル・レベルのメカニズムを前提しないということは、現象学がこうしたメカニズムに関する理論に対して中立的であるということを意味しない。むしろ、現象学は経験に関する記述にすぎないのであるから、上記のメカニズムに関する何らかの理論によって補完されない限り、こうして記述された経験を説明することはできない⁽⁹⁾。知覚的現前の問題に対してノエが与える答え（第3.4節）は、一つの現象学的な記述と見なしてよい。彼は、表象の豊かさでなく、環境へのアクセスの豊かさに訴えることによって、経験の豊かさを確保しようとする⁽¹⁰⁾。それでは、環境へのアクセスをその構成要素として含むものと考えられた経験は、いかなるメカニズムによって説明されるのか？

4. 知覚経験の〈感覚運動説〉とそれに対する批判

4.1 知覚経験の〈感覚運動説〉

ノエとオリーガン(O'Regan & Noë, 2001)は、スナップショット説のように、知覚経験を脳内のどこかに外界の内的表象を持つことと見なすタイプの知覚理論によっては、なぜこのような表象を持つことが知覚経験を生じさせるのかを説明できないとして、これに代えて知覚の「感覚運動説」を提案する⁽¹¹⁾。感覚運動説の基本的なテーゼは、知覚とは、ある種の知識によって媒介された環境探査活動である、というものであり、この知識とは、様々な運動行為によって引き起こされる刺激の変化を支配する「諸規則の構造」についての知

識である。眼球運動に伴って網膜上の刺激が変化するように、感覚刺激と運動行為の間には法則的な依存性が見られるのであり、この諸法則の構造をノエらは「感覚運動随伴特性 (sensorimotor contingency)」と呼ぶ(ibid, p. 940-941)。視覚、聴覚といった諸々の感覚様相の相違は、こうした感覚運動随伴特性のパターンの相違によって構成される(ibid., p. 943)。

ノエ(Noë, 2002)によれば、われわれの運動行為が感覚刺激を生み出す仕方に習熟することは、実践的なノウハウ（「感覚運動スキル (sensorimotor skills)」）の形で、われわれが環境へのアクセスを持っているという暗黙の知識を構成する。フェンスの向こう側にいるネコを見る、というノエ(ibid.)が挙げる例では、ネコの一部はフェンスに隠れて見えないにもかかわらず、これを見ているあなたはネコ全体が現前しているように感じる。これはあなたがどのように動けばネコの今隠れている部分を見ることができることを知っているからである。このように、知覚によって入手すべき情報は環境そのもののうちにあり、身体運動によって必要なときに入手可能であるのだから、知覚においてわざわざ環境の詳細な内的モデル（表象）を作り出す必要はない。

感覚運動随伴特性についての知識に基づいて環境を探索する能力が、知覚経験の基盤となる。ただし、動物がある対象に気づいている (be aware of) と言えるためには、動物がこの対象に関する感覚運動随伴特性に習熟しているだけでなく、この感覚運動随伴特性についての知識を思考、推論、計画などの目的のために利用できる必要がある(ibid., p. 943-944)。つまり、フェンスの向こう側にいるネコがあなたの視野に入っており、あなたがどう動けばこのネコの今隠れている部分を見ることができるかを暗黙裡に知っているだけでなく、例えば「あれがうちのネコならば今隠れている部分の毛皮には茶色の斑点があるはずだ。よし、頭を右に動かして確かめてみよう」などと考えて、この知識を利用できるのでなければ、あなたはこのネコに気づいていることにはならない。

ノエとオリガンは、感覚運動説によって知覚意識をも説明することができると主張する。彼らによれば、意識、例えば視覚意識とは、視覚的気づきのことに他ならない。しばしば意識経験は、それを欠いた単なる気づきと異なり、ある質的、内在的性質（「クオリア」）を伴った内的状態であると考えられてきた。しかし、意識経験はこのような内的状態ではなく、感覚運動随伴特性の行使という意味で、「われわれが行うこと」である(ibid., p. 960)。従って、経験状態に伴うクオリアという考え方はカテゴリー錯誤であり、経験に伴う質的性格は感覚運動随伴特性の性格およびその様々な行使の仕方によって構成される。ノエらが挙げる例では、「赤いものを見ること」という経験を定義するものは、赤のクオリアなどではなく、この赤いものを見る際、眼球をどのように動かせば網膜に入ってくる刺激がどのように変化するか、という規則に関する暗黙知とこの知識の行使である(ibid., p. 963)。

4.2 感覚運動説に対する批判

本節では、感覚運動説に対する批判として、クラーク(Clark, 2002)のそれを紹介しよう。その批判は主に、彼が「感覚運動至上主義 (sensorimotor chauvinism)」と呼ぶところの、意識的視覚経験の内容を、感覚刺激と身体運動の間の依存性の取るに足りない細部にあまりにも緊密に結び付けようとする姿勢に対して向けられたものである(ibid., p. 189, 193)。

感覚運動アプローチに見られる「われわれの意識的視覚経験の細部は、今ここにおける微調整された運動活動を導くものである」(ibid., p. 195)とする想定を、クラークは「経験に基づく制御 (EBC: experience-based control)」の仮定と呼ぶ。この仮定は、ミルナーとグッデル(Milner & Goodale, 1995)が提唱する「二重視覚システム」仮説によって異議を申し立てられている。それによれば、視覚システムは、視覚入力に基づいて世界の表象を産出し、入力に対する適切な行動を選択することを可能にする「知覚のための視覚」システムと、適切な行為を実行するために必要な直接的な視覚運動制御を与える「行為のための視覚」システムに区分される⁽¹²⁾。経験的事例によって裏づけられたこの説から、ノエらの主張に反して、意識経験と運動行為には直接的な関係はない、と考えられる。

ノエとオリガンは確かに、意識経験が生じるためには、感覚運動随伴特性への習熟だけでなく、これを推論や計画のために利用できるものでなければならない、という点を認めている。しかし、経験的事例が示唆するところによれば、むしろ意識経験は、記憶などの諸能力と統合されることによって運動行為の選択に関わるにすぎない、という意味で、意識経験と運動行為との関係は間接的なものに留まる。クラークは、このような考え方を、「経験に基づく選択 (EBS: experience-based selection)」の仮説として整理している。現在のところ、EBCの仮定よりEBS仮説の方が旗色がよいと言える⁽¹³⁾。

5. 経験の説明における現象学の位置

〈大いなる錯覚〉を巡る論争は、経験の豊かさは何によって測られるべきか、という問題に対する含意を持つ。GI説は、経験の豊かさは表象の豊かさによって測られるべきである、という前提の下に、様々な実験結果によって示される表象の貧しさという経験的事実に基づいて、経験の豊かさ、およびこれを支持する現象学を否定しようとする。

しかし、第3節で見たように、表象の貧しさという事実は、スナップショット説に与しないような現象学が誤っていることを論証できていない。ここで見た現象学的研究は、表象が貧しいにもかかわらず経験が豊かである可能性、すなわち経験の豊かさが表象の豊かさ以外のものによって測られるべきである可能性を示唆する。

こうした現象学を規範として知覚経験の説明を与えようとしたのが感覚運動説であった。感覚運動説は、環境へのアクセスの豊かさを、経験の豊かさがそれによって測られるべき基準として提案する。すなわち、表象が貧しくとも、行為が刺激を生み出す仕方に関するスキルが豊かであるならば、経験は豊かであると言える。しかし、第 4.2 節で見たような批判を考慮すれば、感覚運動説は知覚、特に意識的知覚の説明として成功しているとは言えない。感覚運動説の欠陥は、脳を中心とする知覚システム全体の中で上記のような身体的スキルがどのような位置を持つかを十分に考えていなかった点にある。さて、感覚運動説の失敗は現象学の信頼性に疑いを投げかけるものだろうか？

現象学が経験の説明において積極的な役割を担いようとするならば、われわれは現象学を、経験に関する理論に対して一定の制約を与えるような規範的記述として受け取るべきである。ただし、現象学は、こうして記述された経験を引き起こす因果的メカニズムに関する何らかの理論によって補完されなければならない。この際、現象学の与える規範を充たす理論は複数存在しうるものであり、これらの理論の間で何を妥当な説明と見なすべきか選択する際には、経験的事実との整合性が考慮されなければならない。この観点から言えば、感覚運動説の失敗は現象学の信頼性を損なうものではない。むしろ、現象学の教える「経験の豊かさ」という規範に則った仕方で、感覚運動説の欠陥を克服する理論を模索すべきであろう。現象学はその確実性において特権的な方法ではないが、経験の説明においてこれを欠くならば、説明すべき経験そのものを見失うことになりかねないのである⁽¹⁴⁾。

註

- (1) しかし、実際には書き込みの存在を示す多くの証拠が挙げられている(cf. Thompson, Noë & Pessoa, 1999)。
- (2) 「サッカード」とは、人間や他の動物が常に行なっている素早い (1 秒間に数回) 眼球運動のこと。
- (3) 映像においてプレイヤーたちと闘入者 (女の人またはゴリラ) が半透明であるという条件下では、58% の被験者が闘入者に気づかなかった(Simons & Chabris, 1999)。
- (4) これらの実験の映像がネット上で公開されている(http://viscog.beckman.uiuc.edu/djs_lab/demos.html)。
- (5) デネット(Dennett, 1991)もまた、意識の「多元的草稿 (multiple drafts)」モデルに基づいて、〈意識の流れ〉という考え方を斥ける。それによれば、脳の中には、一切の情報がそこに集まってきて表象されるような場所 (「デカルト劇場」) は存在せず、神経システムに入ってくる情報は、脳全体に分散した並列的プロセスによって絶えず編集作業に曝されている。「時間のどの一点をとっても、脳内の様々な場所で様々な編集段階にある物語の断片から成る多元的な「草稿」が存在する」(ibid., p. 113)ので、われわれの意識の上では時間を通じて一つの物語の連続的な流れが生み出されているように見えようとも、意識の流れと一致するような単一の「最終草稿」のような物語は、脳の中には見出されない。
- (6) ここでは「注意されていない」を、「意識の明示的対象として選択されていない」というぐらいの緩やかな意味で用いており、不注意盲における「予期されていない」という意味ではない。従って、「注意されていない特徴も経験される」という現象学の主張と不注意盲の事実とは両立不可能ではない。
- (7) デネット(Dennett, 2001)は、通常の知覚者が〈スナップショット説〉にコミットしている証拠として、彼らが周辺視野の解像度の低さに気づかされたときに示す「驚き」を挙げ、GI 説を擁護する。しかし、通常の知覚者が〈スナップショット説〉にコミットしているとしても、これはせいぜい、われわれが自分たちの経験についてしばしば誤った信念を抱く傾向があるということを示すにすぎない。知覚経験が〈大い

なる錯覚)である、と言いうるためには、われわれの経験に関する観察が原理的に誤らざるを得ないことを示さなければならないだろう。

(8) GI 説は、「表象が貧しいならば、経験は貧しい」という推論を支持するものであるが、「表象が豊かならば、経験は豊かである」という推論を支持しているわけではない。

(9) ここで、ある現象を与えられるがままに記述することに対して、ある現象を説明するとは、特に、この現象を引き起こす(与えられたものを越えた)因果的メカニズムを明らかにすることを言う。

(10) ただし、〈スナップショット説〉によらずに経験の豊かさを説明できる理論は、ここで挙げたノエの説(感覚運動説)のみではない。対案として挙げられているものには、感覚運動説が内的表象は豊かでないと仮定するのに対して、その瞬間ごとの内的表象は豊かであるのだが、人々はその細部を一定の時間にわたって貯蔵しておくことができない、という説がある。しかし、クラーク(Clark, 2002)は「束の間の気づき(fleeting awareness)」と呼ばれるこの説が、9秒間もの間ゴリラの刺激が提示されたのに被験者がこれに気づかなかった不注意盲実験(Simons & Chabris, 1999)の結果を説明できないとして、これを斥ける。

(11) 感覚運動説は、知覚を一種の身体行為と見なすという観点から、知覚に対する「イナクティブ・アプローチ(enactive approach)」とも呼ばれる。

(12) この二つのシステムは、前者が第一次視覚野(V1)に発し、下側頭皮質(inferior temporal cortex)に投射される「腹側経路(ventral stream)」によって、また後者が同じくV1に発しながら後頭頂皮質(posterior parietal cortex)に投射される「背側経路(dorsal stream)」によって担われる、という仕方でも、機能的のみならず、解剖学的にも区別される。この際、重要なことは、腹側経路に損傷を追った患者が、視覚的気づきを伴った対象認識に失敗する「視覚失認」の症状を患っているにもかかわらず、その運動行為の多くを制御できる、という点である。

(13) クラーク(Clark, 2002)はまた、ノエらによる知覚意識についての説明(第4.1節)が十分なものでない、とも指摘する。感覚運動説を採れば、知覚的感受性と知覚的気づきの両者を具えた単純なロボットも、質的性格を伴う視覚意識を持っている、というわれわれの直観に反する帰結を生じる。

(14) 本稿の執筆に当たり、太田紘史氏(京都大学)と小草泰氏(大阪市立大学)に貴重な助言を頂いた。

文献

- Blackmore, S. (2002). 'There is no stream of consciousness', in A. Noë (Ed.), *Is the Visual World a Grand Illusion?* (pp. 17-28), Imprint Academic.
- Clark, A. (2002). 'Is seeing all it seems?: Action, reason, and the grand illusion', in A. Noë (Ed.), *Is the Visual World a Grand Illusion?* (pp. 181-202), Imprint Academic.
- Dennett, D. (1991). *Consciousness Explained*, Boston, MA: Little, Brown and Company.
- (2001). 'Surprise, surprise', commentary on O'Regan & Noë (2001), *Behavioral and Brain Sciences* 24(5), 982.
- James, W. (1890). *The Principles of Psychology*, vol. 1, Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Mack, A. & Rock, I. (1998). *Inattentional Blindness*, Cambridge, MA: MIT Press.
- Milner, D. & Goodale, M. (1995). *The Visual Brain in Action*, Oxford: Oxford University Press.
- Noë, A. (2002). 'Is the visual world a grand illusion?', in A. Noë (Ed.), *Is the Visual World a Grand Illusion?* (pp. 1-12), Imprint Academic.
- O'Regan, K. & Noë, A. (2001). 'A sensorimotor account of vision and visual consciousness', *Behavioral and Brain Sciences* 24(5), 939-1031.
- Simons, D. J. & Chabris, C. F. (1999). 'Gorillas in our midst: sustained inattention blindness for dynamic events', *Perception* 28 (9), 1059-1074.
- Simons, D. J. & Levin, D. T. (1998). 'Failure to detect changes to people in real-world interaction', *Psychonomic Bulletin and Review* 5, 644-649.
- Thompson, E., Noë, A. & Pessoa, L. (1999). 'Perceptual completion: A case study in phenomenology and cognitive science', in J. Pettit, F. J. Varela, B. Pachoud & J.-M. Roy (Eds.), *Naturalizing Phenomenology: Issues in Contemporary Phenomenology and Cognitive Science* (pp. 161-195), Stanford, CA: Stanford University Press.